平成23年8月1日

図書館報

光丘

No.139

光丘文庫の思い出

国文学研究資料館教授
鈴木　淳

はじめて光丘文庫を訪れたのは、今から二十年ぐらい前、国文学研究資料館に赴任して間もなくの頃であった。当文庫の調査収集の担当になったこともあり、挨拶を兼ねて、本の閲覧に伺ったのである。日本海の港町として栄えた酒田市の西郊、日和山公園に至る坂道の途中、こぢんまりとした瀟洒な洋館に辿り着くと、そこに光丘文庫があった。中に入ると、当時の文庫長ほかの懇篤な応対を受け、感激かつ恐縮した。交わした話題のひとつに、文献資料部の共同研究の成果として出版された『酒田市立光丘文庫俳書解題』があったが、中身は一向、不案内であったため、恥を掻いた記憶がある。

光丘文庫は、当地の素封家本間家第三代の光丘の遺志を汲んで設立された文庫で、和歌、俳諧、小説類、教養書といった幅広い蔵書に加えて、郷土資料にも富んでいた。国文研が、当文庫の調査、収集をさせていただくようになったのは、昭和四十八年（一九七三）以来のことで、収集点数は千六百点余に及ぶ。その時から、東北地方の研究者の方々に無理をお願いして、少しずつ事業を進めてきた結果、ようやく区切りを迎えることができたのである。国文研にとって何よりも心強かったのは、文庫から終始、変わることのないご理解をいただけたことであった。なによりもまず、そのことに厚く御礼申し上げたい。

蔵書中の圧巻というべきは、庄内藩士の池田玄斎が江戸での見聞を元にした随筆『弘采録』『病間雑抄』『大泉叢誌』といった浩瀚な随筆類である。玄斎は若くして目と耳を患い、そのことが彼をして筆硯に耽溺せしめることになった。内容の眼目は、江戸の学芸家の逸話の数々で、森銑三の「酒田訪書録」（『著作集』第十二巻「人物雑稿」所収）に触りが抄出されている。『大泉叢誌』は東大史料編纂所に写しがあるものの、『弘采録』『病間雑抄』は天下に唯一ここだけの資料である。何はおいてもこれらの随筆だけはマイクロフィルムで撮影、保存したいとの思いに駆られ、百巻を超える『弘采録』などは、複数年に亘って収集に努め、なんとかその責を果たすことができた。

当文庫からは、個人的にも恩恵を蒙った。もう大分前のことになるが、小宮山昌世、通称木工進、号謙亭という代官にして学芸家を追いかけて、その年譜稿の作成を試みたことがある。はじめは『名賢和歌秘説』の書写者として出逢った昌世であるが、細井広沢門の書家として和漢の書をよくし、和歌、漢文にも通じたほか、有職学や度量衡の著述もあり、中々摑み所がなかった。さらに、英一蝶の実録『民蝶半記事伝』を物するなどの奇才ぶりを目の当たりにするにつれ、ついつい深みにはまり、国文研の紀要の紙幅を二号に亘って汚すことになった。こんな得体の知れない人物の研究に憂き身をやつす自分が、哀れに思われたほどである。

前置きが長くなったが、この昌世について、『弘采録』に、甲斐石和の代官時代、財政的に窮迫して年貢の上納を怠った結果、罪を得て職を失い、謹慎していた間、事もあろうに、仙台の伊達家に借金を申し出た書翰の写しが収められていたのである。さっそく拙稿の一項に加え、彩りを添えたことはいうまでもない。

案外知られていない 身近な鳥の生態(一)

日本白鳥の会理事　角田 分(わかつ)

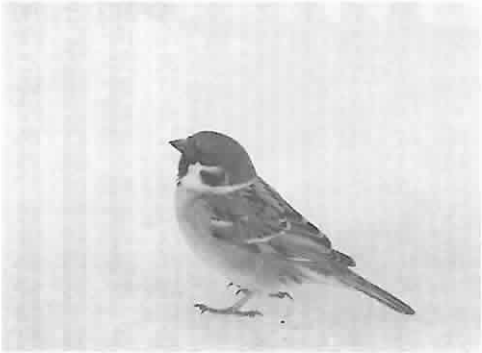
スズメ

あなたは、今年(二〇一一年)カッコウの初鳴きはいつ頃お聞きになりましたか?

私は、五月十七日に聞きました。今年は、例年より、寒かったせいか一週間ほど遅かったように思えます。また、その声を聞くことも年々少なくなってきているようにも思えます。

初鳴きが遅くなっているのは、カッコウが托卵(※1)するオオヨシキリなどの鳥が少なくなっているからかも知れませんが・・・。

身近な鳥と言ってもその人が住んでいる地域によって身近さに若干違いがあるとも思いますが、ここでは「スズメ」「カラス」「ツバメ」たちをはじめ、ごくポピュラーな鳥の生態などについて数回にわたって書きたいと思います。



スズメは留鳥(※2)? 実は漂鳥(※3)

高齢者と言われる人にとっては、昔からよく知られている鳥で、小学校唱歌にもあるほどの鳥です。

スズメは、冬でも見かけることから、留鳥と思われているようですが、地方によっては実は漂鳥か渡り鳥という範疇に入れる方がいいと思われる鳥です。

山形県唯一の離島飛島では、冬になるとスズメの姿を見かけることがほとんど無くなるほどなのです。生態調査で標識を付けて調べた結果、新潟県から静岡県まで移動(漂行)していることが分ったほどで、しかもその多くがその年生まれの若鳥だったと言うことでした。

冬に自宅近くで見ていたスズメも実は、もっと北の方から、漂行してきているという可能性が高いと言うことです。

スズメは子殺しも……

スズメは、一夫多妻の鳥だということはご存知でしたでしょうか。しかもスズメはそのために子殺しまでしているというのです。スズメのオスは、最初のメスに卵を温めさせながら違うメスにも卵を産ませるのだそうです。そして、最初のメスのヒナが孵(かえ)るとそのヒナに給餌をします。その間に、二番目のメスのヒナも孵りますが、オスが最初のメスのヒナにばかり給餌をするために、二番目のメスが最初のメスのヒナを殺そうと襲うのだそうです。最初のメスのヒナがいなくなれば自分のヒナに給餌をしてくれるだろうと思うらしいのです。何だか、二番目のメスの気持ちを思うといじらしくなるのは私だけでしょうか。

スズメは、いつも見ているから留鳥だとか、自分の家の屋根裏で子育てしているから一夫一妻の鳥だと思い込んでしまっているのかも。

スズメの先生は なぜムチを持っているのか

今はほとんど歌われなくなっている文部省唱歌に「スズメの学校の先生は、ムチを振り振りチーパッパ……」というのと対称的に「メダカの学校は……誰が生徒か先生か……」があったのをご存知の方は多いと思われますが、鳥に関心を持っている一人の元教師として『なぜスズメにムチを持たせたのか』というのが、とても気になっていました。

調べてみましたが、やっぱり歌は世に連れ、世は歌に連れのようなのです。

スズメの歌もめだかの学校も実は、文部省唱歌のために、文部省唱歌を習ってきた年代の人は全国的にこの歌を歌ってきたのです。

なぜ、スズメの先生にムチを持たせて、メダカの学校では、「誰が生徒か先生か」わからない状態の学校なのかは、この歌が作られた時代背景がそうだったのです。

スズメの学校は、大正十年につくられ、メダカの学校は、昭和二十六年に作られたのです。

大正十年代というのは、第一次世界大戦が終わって間もなくの戦後恐慌真っ直中の時代で、ムチを振って国民を動かそうとする状況が見えますし、昭和二十六年というのは、戦後の混乱がまだ続いていて教育に対する先生の困惑している姿も見えるようです。

身近な鳥というのは、知られているようで、案外知られていないものなのです。ちなみに、写真を見ないで、スズメの顔を正しく描いてみてください。

※1　托卵(たくらん):巣作りや抱卵、子育てなどを仮親に托す行為

※2　留鳥(りゅうちょう):季節による移動をせず一年中、同一地域にとどまる鳥

※3　漂鳥(ひょうちょう):一地方の中で季節によって小規模の移動をする鳥

ニュージーランドと日本：震災と絆

東北公益文科大学・ニュージーランド研究所　学外研究員
ニュージーランド大使館　大使付エグゼクティブ・オフィサー
宮崎智世

通算5人の歴代駐日ニュージーランド大使に仕えてきたが、これほど不測の事態に翻弄されたことは初めてである。今年2月22日にニュージーランド（NZ）第二の都市であるクライストチャーチを襲った大地震、そしてその後間もない3月11日に発生した東日本大地震。この4ヶ月は瞬く間の出来事だったような気もするし、遅々として進まない重く沈んだ時間だったような気もする。

実のところ今年2月のクライストチャーチ南部地震は昨年9月に発生した地震の余震であったそうだ。揺れの大きかった本震は早朝であったため、建物の損壊だけですんだが、2月の地震は日本人28名を含む、韓国や中国からの留学生が犠牲となった。大きな志を持ったご子息をNZに送り出されたご遺族の悲嘆は推し量れるものではない。

東日本大地震が起きたのは、私たちがまだクライストチャーチ地震の対応に追われているさなかのことであった。日本政府の要請を受けて、NZから早々に緊急援助隊が駆けつけた。52人からなる大規模な海外派遣は日本が初めてである。ご周知の通りNZは南半球に位置するので季節は逆になる。隊員の多くは真夏のクライストチャーチでのがれき撤去作業から、夜には氷点下17度にまで下がる極寒の南三陸に直行した。

私たち在京のNZ大使館職員は、地震発生時に該当する地域にいたであろうと思われる自国民2000人強の安否確認作業に取り掛かった。地震、津波に加えて、福島第一原発の事故による放射能汚染の可能性が海外メディアで大きく取り沙汰されると、本国にいる家族からの問合せも一段と増した。元々外交官10人を含む総勢40人程の小規模な大使館である。放射能汚染の拡大を恐れて、数々の外資系企業や在外公館が大阪以西に拠点を移すなか、NZ大使館は反対に、本国を含む、ロシア、英国、マレーシア、ベトナム、米国、台湾から、かつて日本での駐在経験を有する外交官を東京に呼び寄せ、帰国を望む人々を救出するために被災地にもその都度赴いた。NZ大使館の外交官は8～9割の確率で流暢な日本語を話すので、非常時に本当に頼りになる。

感心したのは原発事故への対応の仕方である。NZは極めて厳格な非核政策を執っており、国内に原発は存在しない。よって元々核に対する意識は非常が高いのだが、原発事故後の日本政府による発表をただ鵜呑みにするだけではなく、米国、オーストラリア、カナダなど他の在外公館と情報交換をしながら、本国から原子力の専門家を召喚して独自の放射能計量を行った。そして私たち一般職員にも一連の情報共有を欠かさず、その段階で最も正しいと考えられる状況分析と起こりえる最悪のシナリオとを、素人にも分りやすい形で教えてくれた。

NZと日本両国は前後して未曾有の震災に見舞われ、それぞれが今復旧復興に向けて歩み出そうとしている。ともに厳しい現実に直面しているし、また余震も続く。しかしながら、そこには両国ならではの温かい絆を感じる。

私自身はゴールデンウィークに、ケネディ駐日NZ大使に随行して東北へ炊き出しにでかけた。初日は宮城県七ヶ浜で、そして二日目は富岡町民（NZオークランド友好都市）が避難している福島県郡山市で、NZ牧草牛をバーベキューにして食してもらった。つい先日は、日本在住のNZ人とNZが大好きな日本人有志らの協力のもとで、650人が参会するチャリティー・ディナーを東京のホテルで開催した。売上げの一部は東北の子供たちをこの夏休みにNZへ招待するための資金となる。

NZの先住民族、マオリ人は逆境において「Kia Kaha・キアカハ（強くあれ）」と、自分自身に言い聞かせる。ともに復興に向けて、「がんばれ日本、キアカハNZ！」

両国の震災からの復興を支援するNZ官民による「キアカハ！運動」のロゴ

茶筌供養の生い立ち

なごみ会会長
萬谷和子

第二十七回羽黒山奉納茶筌供養祭を六月十五日に無事終えほっとした処に館報「光丘」の執筆依頼をいただき過去を振り返るチャンスをいただきました。卯年七巡りの年女、萬谷和子、人生の区切点として『始めあるものは終りあるもの』庄内羽黒の地にかけがえのない伝統文化として正しい根っ子と太い幹が、三十年の歳月を経て育ちました。『わけ登る麓の道は数あれどめざすは一つ山の灯』。

三山神社とは半世紀のおつき合いを通じ、実に多くのことを学ばせて頂きました。

三十代（一九五八）頃は社会も不安定＝内憂外憂人知れず悩み＝壁につき当り煩悩の日々外交で羽黒手向を廻って居り神社にも足を運びました。

合祭殿の神殿にぬかずき気を静め神様にもろもろの悩み事、心を打ち明け自身で問い解決霊気を胸一杯吸い込んで『心願成就』湯殿山まで足をのばしました。

湯殿山には阿部良春奉行さんが居られ人を包み込んで下さるおおらかな話に、下界にてセコセコ暮らす私は人間的な魅力にひかれ参籠も致しました。風呂は岩より沸き出る薬湯赤鉄色の鉄分が下にたまって居りヌルヌルは全くしません。大自然の山容の懐に身を委ねて自然と一体感という気宇壮大な気分も霊山湯殿で味わいました。

友の田桑良子さん阿津啓さんも私の運転で心の原郷である大自然に身をゆだねて、清浄な気分を存分に味わい帰ってきました。

仕事柄茶の湯の先生と話す機会に恵まれ茶で一番働き者の茶筌穂先が磨り減って一所懸命に働いてくれた茶筌、捨てるか子供のオモチャ何ともやり切れない、本音の声、何とかならないものかと阿部奉行さんに相談しました。茶が日本文化として定着したのは、室町時代、村田珠光が茶を粉末にして飲むことを考え鷹山宗砌が考案した指頭芸術の茶筌、茶の湯を体系づけた千利休、茶筌を神社でお焚き上げ行事を考えて下されば、日本中の茶筌に関りのある方々は喜ろこんで下さることでしょうと申し上げたら、（良いことだから考えましょう）萬谷さんの考えで前に進んだらよい、左に行ったらよい、右に行ったらよい、と云われる通り行動取るよ、世の中のことについて全く世間知らずの私、神社で考えて下さり、私が協力するという早合点をしてしまいました。

単純な考えでは行かないこと日を経るにつれて理解を深めて、此のことは素人の人間はやるべきで無いとすっかり思いの外のことになって脳裏より消えて居りました。

手向の富樫茂さんが十年ぶりに尋ねてこられ、茶筌供養という大変良いことを考えて下さりありがとう、藪から棒の話に戸惑いました。二十年前に阿部奉行さんと話したことどの様な波紋で伝わって行ったことなのか、富樫茂さんとは羽黒農業共済専務時代にお世話になった方でもあり定年後家に居り悶々として居る所に茶筌供養の話しが耳に入り、自分の生涯の仕事として考えたい自分も神職という、身分もあるので、何度も家へみえられ電話も下さいました。神林茂丸さんの部屋で話し合いましょう、当時定年後の男性は粗大ゴミ、濡れ落葉の風評が定着してた時代です。此の問題は考えれば考える程難しい人間関係、一国一城の主にて流派によって考えもあることでしょうし、庄内一円の茶道の先生方の協力無しには事は運ばないし、此のことは無いことにしましょうと、何度申し上げても実行したいとの信念、畳に頭を下げて人格者の富樫さんの一途な願いに、私も仏心が出て参り、同席してた神林氏の奥さんみさをさんと相談しました。

これ丈熱心なことなので富樫さんが主体で私が協力するとの形で考えましょう。発起人として五名、酒井忠明、林正近、勝木貞蔵、山田雄介、佐藤三郎、私は本間美術館館長佐藤三郎氏に茶筌供養の趣意を説明理解を頂き判を頂きました。外は全部鶴岡地区なので富樫さんが廻り、四名の方の判これで発起人の五名のご賛同を得ました。

碑は必ず出来ることなので、殿様の酒井忠明様より、供養祭の根本としての碑に刻む文字「茶筌供養塚」筆文字にてお願いをする。富樫さんよりは殿様に行って筆文字お願いしてきたよ。と電話ありました。

昭和六十年、この年は「乙丑（きのとうし）年」で、奇しくも峰子皇子が羽黒山を開いた年と同じ年回りでした。

六月十五日。十五とは陰暦でいう月満ちる日、満月の日でもあります。

「十五」の数は不思議と人間の生活や歴史等と深くかかわってる数字で、夫婦の契りを結ぶ「三々九度」の数を足すと十五となります。月山は御祭神が月読命で、卯と関係があり子供の頃童謡で歌った、うさぎうさぎ何みてはねる、十五夜お月さん、見て跳ねる。

「七・五・三」お祝に良くお餅・饅頭をお配りする数も足すと十五、釈迦・空海・芭蕉も十五日が誕生日との由。

奇数の割り切れない数より、教わる人生の不思議を感ぜずにはおられませんでした。

神林先生とご相談の上、六月十五日を「茶筌供養祭」の齋行日と決めたことでした。

「諸家文書目録Ⅰ」伊東家文書 解題 その二十四

前光丘文庫古典籍調査員
土岐田 正 勝

「一、支配 (三)戊辰戦争」より
一、三番大隊長・酒井兵部が亀ヶ崎城代へ救援要請

『伊東家文書目録』の「戊辰戦争」の項には、二八〇点におよぶ戊辰戦争関係史料が含まれている。しかしその七～八割は、征討軍（官軍）が戦争終結後に酒田へ駐留した際の、食事賄料支払い記録や、「金札」による清算に関するものである。

戊辰戦争は、明治元年（一八六八）九月十六日の庄内藩降伏を以て終結を迎える。酒田は戦場にはならなかったものの、その影響は大きかった。

『伊東家文書』の中から、酒田が直接戊辰戦争に関わった特徴的な部分を、二～三上げてみる。

一つは慶応四年（一八六八）四月二十日付で、庄内藩三番大隊長・酒井兵部が吹浦口から本荘方面へ進軍の途次、亀ヶ崎城代・朝岡助九郎宛に発した書簡の写しである。それには「秋田勢が昨夜より、追々小砂川へ押し寄せ発砲、今朝より観音森へも押し寄せている。農兵ばかりでは、容易ならざる事態である。応援の兵を繰り出して欲しい」というものである。

庄内藩はこの後、「亀ヶ崎隊」を組織して前線へ繰り出し、現在の秋田空港近郊の椿台で激戦を展開、奮戦するのである。

二、征討軍接近時の「心がまえ」（「触書」）

二つ目は、明治元年（一八六八）八月四日付の、酒田町月番役から町々肝煎に発せられた、征討軍酒田来襲時における心得書、「触書」のことである。これには①近海へ征討軍が渡来したら、半鐘を二つ拍子で打ち鳴らすこと、②老若・婦人に限り、妙法寺山へ立ち退くこと、③壮年の者は消火に協力、弾丸が飛んで来ても恐れないこと、④鉄砲稽古希望者は、願い出ること、⑤容易ならざる事態につき、「触書」を全町民に徹底すること、等の心がまえが記されている。

三、戦後、征討軍は酒田の寺院や民家に駐留

三つ目は明治元年九月、庄内藩降伏とともに薩摩・長州・肥前・鍋島・佐土原・小倉・因州・松江藩等の官軍兵士が、酒田の寺院や民家を宿舎として駐留したことである。その数は、四千人に達したという。征討軍参謀は、酒田町民に迷惑をかけないよう、厳重な申し渡しをした。

物価は高騰し、明治元年一月に一升八一〇文であった白米が、翌二年九月には、九八〇文になっている。

征討軍は明治元年九月に酒田入りしたが、大きな事故もなく、翌十月から、引き揚げを開始した。ただし雲州松江藩と肥州蓮池藩の藩兵千人ほどは、翌二年八月まで残留した。残留兵は、寺院や民家に分宿した。のちに自由民権運動で著名になった森藤右衛門家にも、松江藩の八人が駐留した。

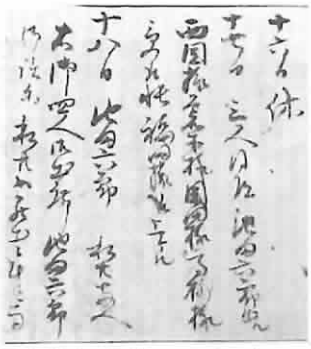
明治二年（一八六九）三月に蓮池藩兵が宿舎にした寺院とその人数は、表の通りである。

日和山の光丘神社北側にある梅林の中に、「官軍兵士の墓」がある。三基は雲州藩兵の墓、四基は肥州蓮池藩兵の墓である。戦争による傷病死によるものと思われる。「官軍兵士の墓」の由縁であり、貴重である。

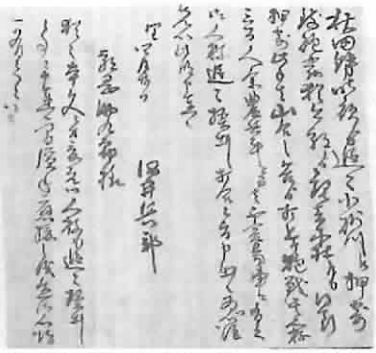
明治2年（1869）3月、蓮池藩兵駐留寺院と人数

町名	人数
①浄徳寺	59人
②妙法寺	31
③海晏寺	71
④玄興寺	17
⑤雲照寺	12
⑥安祥寺	24
⑦正徳寺	14
⑧大信寺	13
⑨真量坊	16
⑩浄福寺	13
⑪善祥寺	12
⑫徳念寺	16
⑬泉流寺	70
⑭万蔵院	21
⑮龍厳寺	45
⑯等円寺他	54
合計	488人

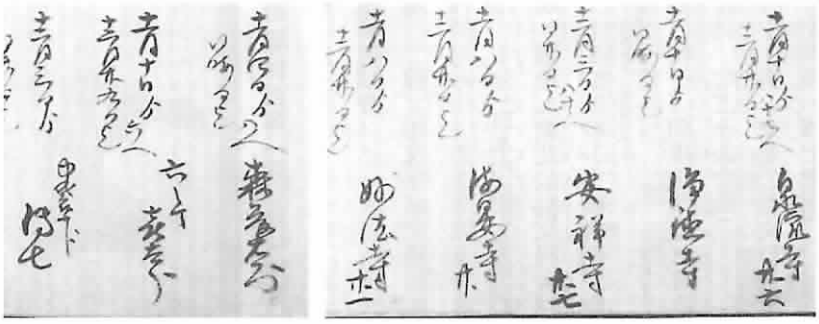
（「明治2年3月分、蓮池藩兵賄料受取書上帳」）



伊東弥伝治筆、明治2年8月の「覚」。
酒田民政局長官や学而館（がくじかん）創立に貢献した、蓮池藩出身の西岡周碩（しゅうせき）も登場。
（「伊東家文書」、酒田市立光丘文庫所蔵」）



明治元年閏4月20日付、酒井兵部より朝岡助九郎宛書簡の写し、
（「伊東家文書」、酒田市立光丘文庫所蔵」）



明治元年十一月、征討軍駐留の宿舎になった寺院や森藤右衛門家、
（「伊東家文書」酒田市立光丘文庫所蔵）

図書館だより

平成二十三年度の図書館運営

図書館長　小松　秀司

一　図書館の基本方針

図書館は、生涯学習機関であり、また地域の情報センターでもあります。幅広い分野の資料や情報を収集・保存し、市民の教養、調査研究、レクリエーションに資するとともに、施設環境の整備を図り図書館サービスを充実し、市民の要望に応えるよう努めます。

さらに、子どもの読書活動の推進に取組むとともに、学校図書室に対する支援を行い、読書に親しむための環境整備の向上を図ります。

二　図書館の重点施策

①図書資料の整備充実

市民の読書要望に応えるために有用な資料や情報の収集・提供に努めるとともにレファレンス（参考・調査業務）サービスやインターネットを利用した資料検索やリクエスト（予約）サービスの充実、ＤＶＤ等の視聴覚資料の充実に努めます。

②子ども読書活動の推進

「酒田市子ども読書活動推進計画」に掲げた主要事業を展開していきます。

具体的には、児童図書の充実や、ブックスタートへの協力をはじめ、幼児期からの読書推進に努め子どもたちの読書活動への支援を行います。

さらに、児童読書関連の各種講座やお話し会を開催し、乳幼児期からの読書の大切さや楽しさをより多くの方々に伝えていきたいと考えております。

③図書システムの活用

中央図書館、ひらた図書センター、松山分館、八幡分館及び東北公益文科大学間のネットワーク機能を生かすなど連携をさらに強化します。

システムの統合により、携帯電話からの本の検索や、予約も可能となりましたが、さらにより使いやすいシステムとなるように心がけ、多くの方に利用していただけるよう運営と管理に努めます。

光丘文庫
平成二十三年度の取り組み

光丘文庫は、財団法人光丘文庫から受け継いだ古典籍、漢籍、準漢籍、古書等と、古記録、個人の旧蔵書を保存し、資料として利用していただくとともに、酒田市指定文化財としての建物を見学いただく機会が多くなっています。

光丘文庫の現況を踏まえながら、その文化的価値を最大限に生かすため、次の点に留意し、利用しやすい文庫の実現を目指して運営に当たります。

①資料の整理・保管

古文書等の資料の散逸を防ぎ、郷土史関連の資料の充実を図るため、収集・整理に努めるとともに保管のため適切な管理に努めます。

②資料の活用

館内閲覧請求等、閲覧者へのサービスを優先して対応し、古文書や絵図を除き資料の劣化や装丁に影響のない場合には有料でコピーサービスをいたします。また資料の活用向上のため、古典籍調査及び目録の作成を行い、資料の紹介に努めます。

③資料の展示

光丘文庫が所蔵する資料は、時代的価値、歴史・文化的価値からしても、貴重なものが多くあります。

市民の皆さんに、光丘文庫の貴重な酒田のお宝を広く知っていただくとともに、少しでも光丘文庫が身近なものになるよう、テーマを決めて、光丘文庫所蔵展を開催します。年二回の展示替えですが、市民のお宝を実感していただきたいと思います。

松森胤保（たねやす）自筆「両羽博物図譜」

執筆者紹介

鈴木　淳（国文学研究資料館教授）
角田　分（日本白鳥の会理事）
宮崎　智世（東北公益文科大学・ニュージーランド研究所　学外研究員）
萬谷　和子（羽黒山茶筌供養祭奉賛会　なごみ会会長）
土岐田正勝（東北公益文科大学非常勤講師・郷土史家）

デザイン、佐藤十弥

発行　酒田市立中央図書館
酒田市立光丘文庫
酒田市中央西町二番五九号　電話(24)二九九六番
酒田市日吉町二丁目七番七一号　電話(22)〇五五一番
印刷　㈲中央印刷

酒田市立図書館ホームページ
http://www.library.sakata.lg.jp/